

防衛研究所図書館



回	冊	冊	冊	冊	冊
		32	32	32	32

沖繩戦史

(沖縄戦より日本降伏まで)

THE WAR IN THE PACIFIC
— CONCLUSION —
OKINAWA

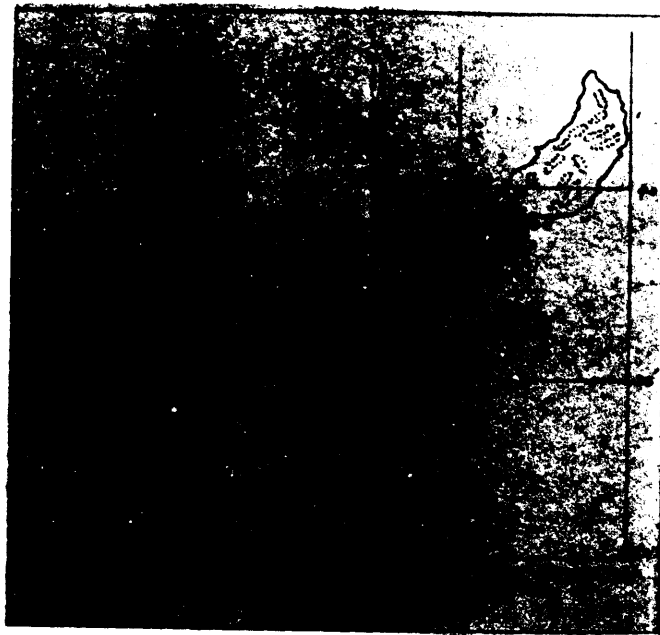


H. E. フォクス 陸軍中佐

(Lt. Col. H. E. Fooks)

昭. 32年4月 陸軍学校研究部 訳

本戦史は英国国防協会誌 (Journal) 53年8月号に掲載された英国陸軍中佐の記事である。



1945年の3月中旬までは、米海兵隊が硫黄島を補給中隊合同攻撃は日本帝国全土にわたる日日爆撃を実施していた。マリアナを基地とする爆撃機および母艦搭載の飛行機は本州に攻撃をかけ一方比島に基地を持つ飛行機は英国海軍航空母艦に護衛され、台湾および支那沿岸作戦に従事していた。

沖縄攻撃が開始されたのは上記のような状況のもとであった。

次の目標として沖縄を選んだ理由としては：

1. この島は優秀な飛行場施設を持つ大きな島であつて、ここから日本本土の最南端である九州までは僅かに350マイルであり、飛行機で1.5時間の距離であつた。沖縄を基地とすれば飛行機は日本から台湾、支那およびマレー方面流路の全船舶を捕捉できることになる。ある意味ではこの九州に近いということは九州基地の日本機が沖縄攻撃を妨害するため疑いもなく出て来てその勢力を一挙に挽回しようとするだろうということもあつた。これが日本機を引き出す良いチャンスともなり得る。
2. この島に攻撃をかけるとすれば当然上陸作戦を実施せねばならぬしそうなるとなれば勿論莫大な船舶の損失は覚悟せねばならなかつた。その結果、近くに港を有することが必要となり、そこに被害船舶を積み、損害修理等を行うことが必要と考えられた。沖縄島周辺には小さな島々によつて囲まれた恰好な泊地があり、慶良間列島は最適であつて、奇状に島が並びしかも沖縄島南端を環状に囲むこと僅かに20マイルという優秀泊地であつた。

沖縄島というのは長さ約5.5マイルであり、地図で見るとかなり大体等分に北緯と南緯に分割している。島の最高峰は未舗の密林地帯で標高1500フィートもあり人家は無い。

反対に南部はうねりくねつた平地でありよく耕されている。ここには幾つかの町がありそのうちには首部の郭もある。この町は鉄道や優秀な道路で結ばれている。この島の主なる防御拠地は南部にある。ここには5つの立派な飛行場があり、これを守るため本島に中将を専とする12萬があり、他に琉球北部および南部に6萬がいて、台湾から日本に至る長い道をつないでいたわけである。増援部隊を必要とすれば台湾には大軍がいて、更に大部隊は九州に準備していた。軍以外の沖縄人は、争資材は持つていながつたが、よく働き、軍の緊要労働力であり、虎の子のように大事にされた有益であつた。日本軍はマイルという長い防御線を構築しようとしたが、この任務がれを実施したのである。誰しもこの沖縄攻戦にはきわめて莫大な暑期間の消耗戦を予期せずにはいられなかつた。

太平洋遠征司令長官ニミッツ大将 (Adm Nimitz) はスプルアンス海軍大将 (Adm Spruance) を本作戦の指揮官にした。スプルアンスは最近硫黄島を陥落させたばかりの勇将であるが、今回は更に困難な仕事に直面したわけである。スプルアンスの下にはターナー海軍中将 (Vice-Adm. Turner) が上陸作戦の全部隊の指揮官に、ミツチー (Vice-Adm. Mitscher) が戦艦ならびその他の戦艦に護衛された第1母艦群司令官に任ぜられた。勿論このほか、H. B. ローリング海軍中将 (Vice-Adm. H. B. Rawlings) がおり、第57機動部として知られた英國艦隊を率い、特殊任務を課せられた。これについては後述する。その他にも何人かの指揮官がいて、補修部、油糧業務、ロケット隊、水中爆破班等の業務を遂行した。米海軍バツクナー大將は地上軍司令官として第10軍指揮した。前回の硫黄島攻戦には全部隊が海兵隊員であつた今回は海兵隊はたゞ2個師団 (第3海兵隊軍団) のみであり他に陸軍も2個師団 (第24軍団および2個師団) を指揮した。数量からいえば、陸海空合せて人員55萬人、戦艦艦300

輸送船および補助艦1100隻をもつて作戦に突入したのである。作戦開始9箇月前より、航空機によつて飛来し各種のカメラにより写真撮影をしているので、地図を所管部隊に配るのにも正確無比のものを作るのに何の苦勞もなかつた。

ニミッツ大将がスプルアンスにあてた命令は以下のようなきわめて簡単な指令であつた。

貴官は以下の目的のためにその部下部隊をもつて沖縄群島を占領し、統治し、防御せよ。

(a) 日本本土および海上交通線を艦船および航空機によつて攻撃するため。

(b) 隣接地区東支那海における攻撃支援のため。

(c) 日本の海上空中連絡線のうち帝國とアジア大陸、台湾、マレーおよび蘭領東印度諸島間の連絡線の切断。

作戦計画にあつては、全然スケールが異なるが、既に実施した上陸作戦の様式を採用した。各種船団、例えば補給品あるいは輸送用のものは太平洋の隅々のカリフォルニアニューゼーランド、オーストラリア、マリヤナ等から船団結成箇所であるガダルカナル、サイパン、ウルシーおよびレイテ海に続々と集合を始めた。沖縄周辺に大船団が密集すれば被害も多く予想されるので慶良間列島という群島は被害船舶修理用の泊地として選定された。慶良間列島は勿論補給基地および飛行場基地としても使用可能であつた。

スプルアンスの命令には下記事項が含まれた。

1. 沖縄島の南半部周囲の完全掃蕩 (この掃蕩作戦の一環は3月9日14日此の作業を開始し、一週間後には3000マイルの海域と3000島の掃蕩を掃蕩した)。

2. 攻撃準備のため上陸地点の掃蕩。

3. 日本艦5日間の艦隊掃蕩および航空機による攻撃。ケイ島は攻撃準備の中心であり、本島は攻撃の中心である。此処からはきわめて長距離の攻撃が可能である。

本攻はハグン海岸に決行の予定で、4箇師団正面で陸軍第1師団、右翼、海兵2箇師団を左翼とする予定であった。上陸後は中央2箇師団は東海岸に他方2箇師団は外側に包囲をし各々北および南に進む。攻撃を実施後必要ならば陽動部隊を中城湾(Baconer Bay)の南部の南東方に実施できるようにする。左翼師団は真直ぐ北へ進出し本部半島に到着するよう命ぜられた。残る2箇師団は那覇から南へ向けて進出するこれには甚の真面目の抵抗を受けるものと予想された。07時(当日)4月1日と決つた。

沖縄守備日本軍は、初期ビルマ作戦においてそのすぐれた戦術によつて栄冠を博した牛島中将が指揮した。その部隊は第32軍であり、その軍区区分は第62師団、第24師団、独立混成第44旅団、砲兵大部隊、大戦車部隊、および大田少将指揮の海軍部隊であつた。総兵力は12萬。

第62師団は支那遠征の勇士で構成する7年兵とか各種種族の古強者の部隊であつた。第24師団は無傷の部隊であつた。第44旅団は牛島軍の要員であり、玉砕部隊の残存者で構成され、人員の孔は民間労働者で埋めていた。日本では階級「乞食旅団」即ち英語では「Pauper Brigade」といわれていた。これはもう殆んど役に立たぬ消耗部隊と思われた。

牛島中将の計画は首府那覇の近傍、島の南部の中央で縦深に配置した強力三線防御陣地により取り覆りであつた。彼はハグン海岸に強い抵抗線を構成する意図は無かつた。彼は沖縄人2箇大隊を注意深く使用し、上陸部隊のかく乱のため出陣させ、真面目の攻陣には引き下ろすよう指令し、最後に陽動部隊の命令を与えた。2箇大隊を本部半島防衛のために派遣した。最精鋭部隊は那覇、これから東へ首里、東へ与那覇と中城湾に到着線を確保のために使用した。背後の防衛は第24師団をあて南方からの攻陣に備えた。戦争終了後牛島中将の遺言によれば、1戦は陽動を実施しようとしたこと

ろに上陸してくるだろう」というよい考えを持っていた。

3月26日、米陸軍ブルース中將(Maj Gen Bruce)は第77師団をもつて、慶良間列島の主なる4つの島のアカ島、ゲルマ島、ハヅル島、ザミ島に上陸して来て、ほとんど抵抗を受けなかつた。アカ島守備日本軍司令官は降伏を拒否した。部下を集め、島中央部の密林に退却しかくたまた最終までそのまゝで、全然妨害もせずそのまゝ連合軍の活動を許した。3月28日には列島は海軍泊地となつたが、潜水艦攻撃には安全であるし敵艦の目線には分散しているし被害は甚微には適当であるし全く良い地形であつた。

4月1日、空中偵察者は、完全に時機を同じくして太平洋の全海域から集つたスプルアンズ大將の各種船団の大行列が沖縄本島南部海域を全部埋めてしまつたのを見た。しかしながら、不幸にも途中敵艦により大被害を受けた船団もあり慶良間列島の泊地は損害船隻一杯となつた。もしその日の全量字表をとつていたならば以下のようなものであつたらう。沖縄の周囲には、50マイル外方には駆逐艦が輪を作り空襲警報を得るためレーダー網を構成していた。ハグン海岸では戦艦巡洋艦の艦隊射撃のもとにバックナー大將は下の地上部隊を数百隻の輸送船、上陸用舟艇から揚陸させていた。同様援護射撃のもと陽攻が本島南部にかけられた。東方約100マイルにはミッチャーの母艦部隊が80隻の艦隊で80マイル平方を遊弋していた。そして、いかなる針路で台湾方面から東京へ攻撃をかけたらよいかを準備し敵艦警戒のため固定目標とならぬよう活動していた。英國第57機動部隊は東方向台湾との中間に行動し武装商船17隻を含む護衛空母群をもつて主動部隊のバックアップ任務に任じた。第57機動部隊の任務は台湾およびサキシマ地域を孤立化させ、支那および台湾方面からの増援部隊が参加せぬように監視することである。

陸軍部隊を上陸させた後は、輸送船、補給船等は小グループに分れ駆逐艦哨戒網に入った。この中には弾薬、食糧を運搬している船もあるし病院船も含んでいたのて便宜上接戦もしなければならないし、また、潜水艦攻撃を避けるために待避運動もしておらねばならなかつた。

第10軍はハダシ海岸に上陸中若干の抵抗を受けた。これは艦隊の援護射撃が一時休止したのによるか、推測した防衛火力が予想以上に大であつたかによるものと思われる。守備の2面大隊は防備していた飛行場を破壊することなく退却した。これは無傷のまま攻者の手中に入った。連合国陸軍は前進計画に従つて北および南に展開した。5日間は南方部隊は徐々に進行したが僅かの抵抗しか受けなかつた。4月5日司令部に抵抗は激しくなつたという報告があつた。4月8日には抵抗は甚しく増大した。11日に至つては「全力を挙げて打て」という意気にもかゝらず全然前進不可能であつた。牛島中將は完全にその欲するとおりに敵を導いたのである。強力な防衛陣地をうちたて、そこで、彼の考えるには敵を徐々に撃破することができるという計画であつた。戦況はこのまゝ数日続いたので陸上戦闘は暫くおいて海上戦闘の様相について研究する。

莫大な損耗にもかゝらず、日本軍は、なお、相当数の潜水艦を有し、特に沖縄島近海には数が多かつた。実際はこのによる船舶の被害は甚大ではなかつたが、この潜水艦によつて探知し得た連合国艦隊の行動は日本軍高級司令部によつて非常に価値があつた。連合軍の作戦行動には必ず空襲がともなつた。

〔3月27日、日本軍は機密兵器を持出した。沖縄周辺の船舶は爆撃機に攻撃された。各爆撃機はあのおの「桜花」といふ可愛い名のついた小型飛行機を持つてこれによつて攻撃した。本機はヒツラーの作ったV1号とよく似ているが最

速にその「桜花」は乗客士を持ち、しかも飛行が成功しよると思ふかろうと空襲は期待できないことである。爆撃機は、この兵器2隻および駆逐艦2隻は大破し修理のため慶良間に引かねばならなかつた。

4月5日には、「神風」400機が沖縄島の点検および島の東方にいた第58海軍部隊を攻撃した。10機の内1機は目標攻撃に任じていた。もし「神風」が命中すれば、例えば駆逐艦とすれば沈没か使用不能となり戦列を脱落せねばならなかつた。更に大きな艦艇では沈没はまねがれるが、大修理を要し長期間戦闘不能となる。人員の被害は一様ではなかつたが、平均すれば「桜花」や「神風」の天人により約二十数名は一挙に殺された。この空襲は4月中続いたがその被害は想像以上であつた。

〔日本帝国連合艦隊司令長官豊田大將は手持の打ちひしがれた艦艇全部に荷たす燃料がないのを承知しているので、戦闘可能な艦艇のみに残つた艦船用燃料を全部積載して出撃させることに決定した。彼の計画によればこの艦隊でもまさか駆逐艦の警戒線は突破できるであろう、その次には輸送、補給船舶がいるからこれをかく乱しようといふのであつた。とも角、内地港湾に於いての損失を極力防ぎ、しかも帝国海軍の名譽を回復しようとしたのである。4月5日豊田大將は下記命令を伊藤第一中將に下した。

〔天一号作戦、作戦命令第607号、第1空制作戦部隊は1945年4月6日瀬戸内海を出撃し神龍の米國海軍を攻撃せよ。攻撃は4月8日未明とする。〕

伊藤は此の特攻攻撃に際し駆逐艦10隻を有し、8000噸の駆逐艦の余裕があつたが、不幸にも空襲で荷たす燃料が無かつた。故に此の艦隊がたとへば戦列を先導せよとも補給の燃料まで十分積載して往くのは疑問である。艦隊は、世界最大の排水量67000トン、16インチ口径の巨砲を有する、艦隊大尉

および第2駆逐隊の8隻、冬月、涼月、磯風、浜風、朝風、初霜、霞により構成された。

艦隊は6日の午後瀬戸内海を出港した。3時間後には東海岸を一路沖端へ南下していた。これを哨戒任務に従っていた米潜水艦2隻スレッドフィン (THREDFIN)号とハックルバック (HACKLEBACK) がその位置を確かスプランス大將に報告した。大將はこの艦隊が沖端へ向うのか、九州西岸の佐世保軍港に向うものか、不明である。更に艦隊を襲撃しよう命じ、また、数個飛行中隊 (Squadron) に出撃を命じた。伊藤艦隊は夜間航行を實施し既に艦隊に接触されていることを無線の通信妨害により承知した。7日0830米軍機1機が発見され、雷撃および2キロ爆弾した艦隊機200機の襲撃を受ける結果となつた。日本軍は基地航空機5機以外は何等防空施策無く、しかも食糧基地航空機も一定時間ごとにしか発艦できなかった。攻撃をかけた米軍機には必ずしも、目的を完遂出来なかったものもあつた。これは艦隊の構成する対空弾薬は極めて少く、正確であり、又攻撃機間で行う音声通信は、日本の妨害により想像以上の困難を引起した。しかし艦隊機一機が来るや否や第2隊の攻撃を反撃し大戦果を得た。大和は大和から距離し攻撃に襲いかかる敵機を幾分なり減少しようという淡い希望のもとに行動した。間もなくは沈没する艦隊機も大和は左舷に敵機の魚雷を受け、航行の自由を失つた。しかしながら不思議にも大和は、又数発の魚雷を受け艦隊機は威力は800、高度も28ノットに低下した。第2隊の攻撃機が到着したが、対空砲火は可成り効果があつた。敵機不能となつた大和は再び襲撃を受けた。これによる被害は艦隊機を撃つことによつて損害を回復しかねた。この結果

く又爆撃を受け艦は35度傾くに至つた。しかも水線下のサイドアーマー (側傾板) を持上げアーマーのない部分までさらけ出すに至つた。この時魚雷5本が更に命中し、その結果1415転覆し、爆発し乗組員2800名のうち300名を残して沈没して行つた。

以下は日本軍の第2駆逐隊の戦況詳細の抜粋である。

- 1417 大和 爆発沈没
 - 1430 涼月 火災
 - 1440 敵機銃射撃が矢別、浜風の生存者を襲う
 - 1450 冬月、初霜、雪風は生存者の救助開始
 - 1505 敵PBM2機は遭難乗務員を救助
 - 1524 冬月はPBMを射撃
 - 1657 霞 沈没
 - 2240 磯風微列離脱 (後進不能)
- 8日
- 0945 冬月 佐世保に到着
 - 1000 初霜、雪風、佐世保着
 - 1430 涼月 佐世保着 被害甚大のため7号乾ドックに入渠

戦果 最小限米機19機撃墜、我が方の被害、大和、矢別、磯風、霞および浜風は沈没。朝霜は不明であるが沈没した模様。

註、日本海軍の4月中旬における勢力は以下のとおりである。

- 戦艦 内地沿岸にあるもの 榛名、日向、赤城、長門
- 航空母艦 内地沿岸にあるもの 天城、電燈、信濃 (未就役) 龍神、霧島は共に損傷
- 駆逐母艦 内地に海電

列島中最も大きな、石垣島、宮古島の飛行場および着物を破壊した。若干の抵抗を受けたが英軍人パイロット達は丁度敵目撃への絶好の訓練攻撃を実施しているようなものであった。敵の第1回の反撃は沖縄上陸決行の4月1日に実施された。レーダーおよび戦闘機の網目を穿り、1機が突入し、インドミタブル (Indomitable) 飛行甲板上の対空砲兵数名が負傷したが、これが被害の全部であった。しかし、その後にもなく(沖風)が突入し、1機のみ成功した。これはインデファティガブル (Indefatigable) の着橋に命中し、14名戦死、16名負傷をし、飛行甲板を使用不能にした。甲板は防衛網板を使用していたので、被害の修理は迅速に終了し、数時間後には再び着橋を可能にした。本空襲中駆逐艦ウルスター (Ulster) は大塚爆弾の命中又は至近弾により大被害を受け、運洋艦ギャンビア (Gambia) に曳航されレイチに入港した。

4月6日、7日には日本海軍最後の戦闘が行われ、わが機動部隊は飛行場制圧のため果敢な働きをした。4月12日にはローランド中將はレイチに帰還準備中であつた。指揮下飛行機は数日の合衆空襲にやゝ疲労していた。彼は、しかし、沖縄に敵の大空襲が實施されているのを知り、祖島本城内の飛行場活動を阻止するため、なお、敵目撃まることを決心した。4月29日に至つて、レイチに向い引上げた。作戦地帯にある(中)の間、13機の空襲を行ひる(中)を撃墜し、(中)を撃墜した。

敵がレイチ到着後1週間経過して、人員被害も修理を了し、ローランドは再びアイズバーク作戦に参加した。彼は5月4日到着し再び作戦を実施した。彼の対空砲兵が強化されたため情報があり、ローランドは、今まで最悪戦闘に突撃してはなかつた艦艇に任務を与える絶好の機会であると、発見、運洋艦をもつて目標からのマイルの所に配置して、

的射撃を浴せた。この戦果は射撃中止後偵察カメラによつて見れば、甚大なものであつた。本戦中、母艦部隊は神威に撃墜された。フォーミダブル (Formidable) は55名を失つた。インドミタブルは、その防衛飛行甲板のおかげで、状況が良く、ほとんど無視できるような被害であり、敵14機を乱闘の未帰隊している。

4日後、フォーミダブルは再び突入され、母艦ビクトリヤス (Victorious) も不幸にも神威2機に息つく間もなく突入された。これは防衛飛行甲板の重要性を物語るもので、この2者は被害が大きかつた。戦闘不能をとらなつて、速成はレイチに帰投し、損傷を修理し、5月24日までに再び任務についた。当日まで本機動部隊の任務は終り、マヌ島の主力部隊に合流し6月の日本内地攻撃の準備をした。アイズバーク作戦中母艦は飛行機5000機を飛ばし、900トンの爆弾およびロケットを落し、敵機200機を撃墜又は破壊し、味方120機を失つた。

再び沖縄本島の陸軍部隊に戻る。本部半島への海兵師団の前進は成功した。敵は戦功に抵抗したが、これを遂破した。ひろがえつて南進部隊は、3個師団であつたがその前進はきわめて遅かつた。1日の前進速度は、ヤードでなくフィートで測る程微々たるものであつた。バクナー大將自身の言葉をもつてすれば、[南部山地のジャップを掃討するために我々はトーチランプとキルク抜きを用いねばならなかつた。]

4月19日には、深谷を下りながら那覇一与那原線道路占領の目的を持つて首里防備陣地への攻撃が開始された。砲兵27個連隊の各種口徑砲すべてを網羅し、初陣の僅かなてを遂げた火力支援のもとに未雨より砲撃を開始し3個師団が前進を開始した。しかし、何となくいかな 1.5時間後には再び出発点に後退していた。翌日も又4月23日までの3日間も、プログラムは全く同じ結果を齎した。しかし重圧は徐々に効果を

表わし、23日から24日の未明にかけて熾熾のもと日本軍第62師団は無抵抗のうちに後退し、第2線の處に依固な陣地についた。4月一杯バツクナー大將は敵を殲滅すべく攻撃を繰返したが、皆無であつた。

5月2日、日本軍守備司令官牛島中将は會議を開き、全軍一致のもと、現在の高度の志氣のもと、いよいよ、防御より攻撃へ転換が到来したことを確認した。上陸作戦、陸路への水上特攻艇攻撃および神風特攻隊を含む苦心した作戦計画を完了した。これは、何のことはない牛島の豪傑夢である。牛島中将の詳しいことはカットした無味乾燥な萬字突進にはなかならなかつた。主攻者は砲兵の彈幕射撃に始まり、次に陸軍、ついで歩兵が続くという計画であつた。5月3日の日没後、攻撃は開始された。間もなく米第7師団から、かつてない猛烈な砲幕射撃であることを報告してきた。しかし、攻撃は失敗であり、日本軍は威嚇を示し、一時的に勢力を奮い出すが米軍は余りにも優勢であり、ふきとぶようなことはなかつた。逆上陸は、上陸地点に着岸した舟艇の地点に指向されたが、不幸にもその舟艇は人員と兵器を潰んだまゝ生存者も少しはかなく沈んでいつた。5月4日一日中攻撃は突進し一時は米軍守備線に1000ヤードも侵入を打ち込んだことあつたが格闘戦により執拗な攻撃も追い払われた。最後5月の4日から5日にかけて牛島は元の防御線に後退した。つゞく3週間もバツクナーの軍いる部隊は同じような苦しい戦闘を続けた。ダカシ峰、砂岩丘、ワナ峰等の(他の戦上有名な山々)名称が、首里岬地の占領以前に頑強に抵抗続けた。しかしこれも艦砲射撃により平地となる程叩かれのである。戦闘は季節風の吹く頃ともなればなほ錯雑した。敵はよく砲地を掘り、よく乾燥させていたが、米軍のはそうではなく、煙気が多くついにそのため赤痢が発生するに至つた。

しかしながら6月中旬に至つて、敵はバツクナーの容赦なき狂直の結束が次第に弱れが見えてきた。6月18日バツクナーは緊要地点の一つが占領されたと聞き、戦況視察のために赴いた。この時不幸にも、バツクナーがその地点に到着したときに敵砲火が炸裂し、彼は戦死した。3日後牛島中将はその部下と最後の晩さん會を開き、全終了後天皇より日本列島中の一島の守備を委せられたにもかかわらず不成功に終つたことを十分考慮したが、も早やできることは切腹以外になかつた。3日後には沖縄島の組織的抵抗は終り、6月25日には沖縄島は連合軍の手中に入つた。

米陸軍の死傷者は29500名、海軍が10000名であつたが、敵は100000名を失つた。

日本における世論は帝國の威光がとみに衰えたのを何とかして回復せねばならぬと燃起になつていた。4月5日ロシヤは日ソ不可侵條約破棄を通告した。ロシヤは、日本がよく事情を承知しているが、当時日本自体何とも反逆しようにもできないところの樺太(Sakhalin)千島(Kuriles)および滿州(Manchuria)を手に入れたかつた。枢軸國の最後の一員であつたドイツも5月に降伏した。日本の過渡は終戦の意向を強く持つていたが、陸軍首魁部が我に兵力3百萬ありの事實を知らぬか(マレー、支那および帝國本土内の統計で)と頑張り、降伏を強く拒否した。しかし必然的に起る帝國の元首、天皇の将来はどうなるかということは誰も確言できるものはいなかつた。しかし、沖縄陥落直前に日本軍は本土防衛の作戦計画を完成した。日本首相の言によれば「軍機は既に戦闘力がなくなつたことを十分知っているのであるがそれを言い出す勇氣がないのだ。我々はこの作戦計画が本土防衛ということを示して戦争終結を求めているのだという意味を十分了解できる」といつている。和平条件受諾のためロシヤ大使を通じ接近をはかつたがその回答は單に「全面降伏

であつてみれば、同盟としてはどうしても承認しかね、その結果は帝国は望みなき谷に陥入れられるのみであつた。

沖繩陥落後、連合軍艦隊主力は陸軍の連続支援任務に就いていたのを解き、レイテ (Leyte) に帰投し、人員は2週間の休息を得、艦船は保養をして次期作戦に備えた。

連合軍最高司令部は最終作戦計画を立て本土攻略に備えた。これは数箇月 (1946年春まで) は実行せぬ予定であつた。また、これは未だかつてない大規模の作戦を展開する予定であつた。周知のごとく発動されなかつたので細部計画まで説明する必要もないが、海軍作戦計画としては下記四大目標があつた。

1. 日本残存艦隊の殲滅。戦傷を受けないで燃料不足のため呉、佐世保に避難している艦艇。
 2. 日本国が戦争遂行のために依存する産業および資源の破壊という準備作戦の展開。
 3. 戦争意欲の低下のため日本国民に常時圧力を加えること。
 4. 本土沿岸封鎖網の充実に伴い、本土への物資補給あるいは支那、マレー、南領東インド (連合軍艦隊のウイグナー、オーストリア部隊もまだ占領していない基地がある) への兵力派遣の阻止をする。
- 上記の目標達成のため、連合軍艦隊主力は7月上旬北上した。日本海軍の内どの艦艇が残存しているか? これは疑問であつた。というのは既にその内の数隻は戦傷を受け、浅海の泥土にかく庵し艦に防空砲台として活動しているような艦もあつたからである。だがしかし、沈没してない艦は戦艦4隻、空母6隻、重巡2隻、駆逐2隻、駆逐艦15隻、潜水艦は数隻不詳であるが40隻にも上るものであつた。大部分のものは呉軍港にあり、一部は佐世保および横須賀にあり、潜水艦は未だ洋上に活動中であつた。

7月10日連合軍艦隊は本州および北海道の沿岸都市を攻撃した。戦艦、巡洋艦は機銃射撃により、一方潜水艦は本土深く飛び手当たり次第飛行場および工場を風つぶしに破壊してつた。東京およびその周辺には空母大型10隻、小型6隻が割当てられた。敵の抵抗は軽微であつた。2週間の間艦隊は本土周辺を上下し、予定目標を遂行し、7月の最後にはその戦果の内証書のみについていえば下記のとおりである。

戦艦-----長門	7月18日横須賀で沈没、
日向	呉で沈没
伊勢	呉で沈没
榛名	呉で沈没
航空母艦---	天城 呉で沈没
	葛城 呉で沈没
	鳳洋 洋上で沈没
巡洋艦----	青葉 洋上で沈没
	利根 呉で沈没
	北上 呉で沈没

7月24日~28日

7月上旬、連合軍は日本に対し降参を欲するならば無条件降伏せよと通告したが、日本は拒否した。7月16日米海軍巡洋艦インディアナポリス (Indianapolis) はサンフランシスコ (San Francisco) からマリヤナ (Mariana) のティニアン (Tinian) 地区へ歴史的な航海をした。それはその荷物の中に破重に梱包された原子爆弾を含んでいたからである。インディアナポリスは7月26日無事帰参の任務を了した。4日後にレイテへの航行中不幸にも敵潜水艦の果敢な雷撃により2隻の魚雷を受け、沈没した。4日後にはその洋上に噴き出した重油のために連合軍航空艦隊が発見し、一部の兵員が救命胴衣により洋上に漂着しているのをつかんだ。飛行機の救助により、士官15名、兵士300名がインディアナポリスの生存者として救助された。

電子複写不可

